

グロテスク～ Aゴシックすごい

GE Gravenによる



第9章



くすぶるガーディアン修道院跡から真西に約12マイルの地点に、一人の人物がいた。

早朝の月明かりの最後の光の下、ニコラス修道士はゆっくりと歩みを進めた。修道院の厨房から昨日の不運な贈り物と神の恵みとも言える贈り物を山ほど抱え、背中を丸めながら、肩に担いだパンパンに詰め込まれた修道士のローブを携えていた。

ニコラスは岩だらけの尾根の頂上まで苦労して登り、膝をついて横になった。冷たい夜の空気の中、彼の息は荒く、白く曇っていた。遠く、かつて川だった広大な干上がった川床の向こうに、彼が何年も前に発見した洞窟の入り口が見えた。彼はそれを「山の口」と呼んでいた。彼は尾根を横歩きで下り、岩だらけの広大な谷を横切り、巨大な黒い穴の中へと足を踏み入れた。

洞窟の奥深くからこだまする声が聞こえてきた。「修道士？」暗闇の中から少年の朗らかな笑い声が響いた。「来ると思ってたよ！ 本当だよ！」

ニコラスは暗闇の奥へと歩きながら答えた。「ラザロ、私だ」
修道士が自己紹介をする間もなく、ラザロは石の角を猛スピードで駆け抜け、修道士に激しく衝突した。修道士と従者は共に地面に倒れ込んだ。

チーズの塊が洞窟の床をよろめきながら転がるように、物が散乱した。

「なんてことだ !ラザロ」ニコラスは息を切らしながら言った。「君は…ああ、だめだ !」修道士は床を這いずり回り、暗闇の中を手探りで間に合わせの袋の中を探った。中には、まだ無傷で封がされたままの血の入ったフラスコがあった。彼は安堵のため息をついた。「主よ、感謝します」と彼はつぶやき、瓶にキスをして、そっと持ち物の間に戻した。

「修道士…ニコラス ? 申し訳ありません、修道士。」ラザルスは立ち上がり、チーズの塊を取りながら尋ねた。

「オディーノ修道士はどこにいますか ?」

「ちょっと待ってくれ。物資を集めるのを手伝ってくれ。手探りで探してくれ。」

ラザロは中の瓶に気をつけながらチーズを袋に滑り込ませると、布から心地よい香りが漂ってきた。「修道士よ、私が集めましょう」とラザロは答えたが、声のトーンは変わり、今はまるで力が抜けたように重苦しい響きだった。

ニコラスは声に出して考え込んだ。「今思い出すと、この山の向こう側に木立があったはずだ。」すると僧侶は突然立ち上がり、顎を撫でながら、何か考え込んでいるようだった。

「まず火だ 火が必要なんだ。」ニコラスは洞窟の入り口に向かって歩いた。ラザロは彫像のようにじっと袋を見つめていた。まるで何か恐ろしいことが起きているかのように。

それと共に。

「ラザロよ、私について来なさい。」

「はい、修道士様。」ラザルスは視線をそらし、ニコラスの後について山口を出て、月明かりに照らされた浅い斜面に沿って進んだ。

「骨まで凍えそうだ。こんな質素な服装では、この森の霧は容赦ない。」ニコラスは両手を素早くこすり合わせ、くるりと向きを変えながら言った。「小さな油ランプと油、ロープの芯、それに火打ち石も持ってきた。さあ、枯れ木を集めて、このしつこい湿った寒さを追い払おうか ?」

「はい、修道士様。」

やがて洞窟の奥深くで、ラザロとニコラスは、その間にパチパチと音を立てる焚き火を囲んで、ずんぐりとした岩の上に座っていた。オレンジ色の光が寒さを吹き飛ばし、洞窟の広大な不規則な地下空間を照らし出した。「やっと火だ」

ニコラスは燃え上がる炎を崇拜し、手を温めた。彼は山積みの彼は燃料を傍らに置き、火を燃え上がらせるために数本の小枝を慎重に選んだ。

ラザルスは炎を通して、ニコラスの精巧に作られたふくらはぎ丈のブーツをじっくりと観察した。

「修道士さん、サンダルはどこですか ?」

ニコラスはくすくす笑った。「もうないよ。僕のブーツ、気に入ったかい ?」ニコラスは焚き火の光にかざしながら、ブーツをくるくると回した。

「そうだ」とラザロは答えた。

自分で作ったんだよ。私がかつて靴職人だったなんて、知らなかったでしょ？

「いいえ、修道士様。」

「どうか私をニコラス、ラザルスと呼んでください。」

少年はうなずいた。「靴を作れるの？ニコラス？」

「確かに、しかも最高傑作だ。これは私が修道院に来る前に作った最後の一足なんだ。」ニコラスは自分のブーツを見渡した。「昔の靴職人時代の話を知りたいかい？」

「そうしたい」とラザロは答え、自分の汚れた足用ミトンに目を落とした。

「では、お話ししましょう。」ニコラスは岩の上で体勢を変え、膝に腕を乗せて炎の方に身を乗り出した。「私がもっと幼かった頃、父と兄と一緒にエフライムというブルゴーニュ地方の南端にある趣のある小さな村に住んでいました。父は彼は村の靴職人で、祖父から技術を学んだ。私たちは皆、店で靴を作ったり修理したりして働いていた。父は、兄と私がその仕事を継いでくれることを願っていた。取引。」

「しかし、本題に入ると、父は病弱になり、店を切り盛りすることができなくなりました。それで、店を続けるのは私たちに任せることになったのです。それはひどい状況でした。ほとんどすべての仕事が私にのしかかったのです。」

ラザロは尋ねた。「あなたの兄はそれらを作りたくなかったのですか？」

ニコラスは首を横に振って言った。「ああ、そうだったよ。父の跡を継ぎたくて、心から願っていたんだ。学ぶ意欲も旺盛だった。でも、神様は彼に靴職人になる道を与えなかった。何度やっても、うまくできなかった。そして、ほとんどいつも、私が彼の後について行って、彼が直そうとした靴を直さなければならなかった。それが長い間続き、ほとんど毎日、夜遅くまで働いていたんだ。」

「お父さんに話したのか？」ラザロは尋ねた。

「いいえ」ニコラスは咳払いをした。「父は死にかけていたし、兄と私はまるで狼のようにいがみ合っていたし、店も経営難だった。父の容態が悪化している中で、私は父に迷惑をかける気になれなかったんです。」

ラザルスは、ニコラスの無理に作った笑顔の裏に、溢れ出る涙に気づいた。「なぜあんなことをしたのか、何度も自問自答しました。毎朝のように店まで歩いて行ったのですが、最後の旅では、店のドアに入る代わりに、店の前を通り過ぎて、そのまま歩き続けたのです。店から離れて、村を出て、そして最終的にはブルゴーニュを出て行ったのです。」

ニコラスは下を向いて言った。「このブーツ以外、何もかも置いてきたんだ。」

「しばらくの間、私はあちこちを転々としながら、生活費を稼ぐためにいくつかの靴修理店で働きました。しかし、それから間もなく、主は夢の中で私の心に触れ、私の魂を揺り動かしました。主は私を召されました

神は私に重くのしかかり、私をガルディアン修道院へと導いた。そこで私は、神に仕える孤独な生活を求めているのだ。そして不思議なことに、私は修道院の壁に囲まれた中で、外にいる時よりもずっと自由を感じていた。」ニコラスは首を振り、どこか懐かしそうな笑みを浮かべた。

"奇妙な。"

「では、あなたの家族はどうなのですか？」とラザロは尋ねた。

「到着して間もなく、兄に手紙を書きました。返事が来るとは思っていませんでしたが、返事が来て、私が去った直後に父が亡くなったと教えてくれました。その後、兄が借金のために店を売ったことも知りました。そして、もう二度と手紙を書かないでほしいと頼まれました。」

彼は父の死の責任をすべて私に押し付けている。

ニコラスは身を乗り出して火をかき混ぜた。「オディーノが全部話してくれたんだ、ラザルス。お前がフードを被っている理由も分かっている。」ラザルスはすぐに頭を後ろに反らせた。フードの生気のない目穴の向こう、焚き火の光が絶妙な角度で輝いているのを見て、ニコラスは自分の目をじっと見つめる、深く探るような青い瞳を見つけた。

「心配するな、ラザロ。オディーノの時も、お前の父の時もそうだったように、お前の秘密は私が守る。」ラザロは何も言わずに炎の方を向いた。

「ラザロよ、私に何でも率直に話していいんだ。私を修道士というより、友人だと思ってくれ。」

ニコラスは火の中に棒を突っ込み、岩にもたれかかった。

「あなたの父上とオディーノの両方から、私が到着する少し前にあなたがガルディアン修道院の門前に置き去りにされたと聞きました。そして、あなたは空気の病気にかかっている、地下墓地から決して出てはいけないとも言っていました。それらはすべて嘘だったのですね？」

ついにラザロは告白した。「いいえ。でも父は私に真実を話すことを禁じました。父はこう言いました。

もし私が自分の本当のことを他の修道士たちに話したら、彼らは私を殺すかもしれない。」

「あなたの病気は、彼が主張していたように、決して屋外の空気によるものではなかった。実は、日光によるものだったのだ。あなたは深刻な日光中毒を患っているのですね？」

"はい。"

「そして、イワンがあなたの病気を記録するためにガルディアン修道院に呼び出した医師は修道院長ですか？」

「私は医者に診てもらったことがない。もしかしたら父が誰かを手配したのかもしれないが……」

「なるほど。ラザロ、お前の父は真実を言っていたのだ。彼らは間違いなくお前を殺していただろう。」

今振り返ってみると、はっきりとわかる。ラザロ、君の父親は君を深く愛していたんだ。

「ええ、そうよ。だって私は彼を愛しているから。」

「お前の父親は、お前が生まれてからずっと、どこにお前を隠していたんだ？」

「彼は大聖堂で私を見つけ、地下墓地、バストンの地下納骨堂に私を隠してくれた。」

「まさか修道院の中で？ !どうやって誰にも気づかれずに済んだんだ？」

「彼は私に黙っているように、そして地下室の扉に鍵をかけておくようにと強く言った。だから、私はそうした。」

「彼は何だと言ってたんだ？！君は生まれたときから話せたのか？」

「いいえ。父がすぐに教えてくれたんです。」

「そして、あなたはすぐに学んだのかもしれない。教えてくれ、あなたはどれくらいの間、地下室に隠れていたんだ？」

「たぶん1年くらいかな。それから父が僕のためにマスクとローブを縫ってくれて、北修道院の門の外に置き去りにされていた僕を見つけたふりをしたんだ。僕は病気のふりをしたんだよ。」ニコラスは再び顎を撫でながら火をくべ、ラザルスが話してくれたことをすべて考えていた。

「君は他の連中とは違って見えるな いや、つまり 君の体格や容姿からすると、獣というよりは少年のようだ。もしよろしければお伺いしたいのだが、ラザルス、君は何歳なんだ？本当に13歳なのか？」

「私はたった7歳しか歳をとっていない。」

ニコラスは首を振り、口元にわずかな笑みを浮かべながら言った。「驚きだ。もしかしたら、君の年齢の差は、並外れた体格を隠すためだったのかもしれない。君の父親は実に巧妙だった。修道院内で言われていたように、君の背中が本当に猫背になっているわけではないことも、今ではよく分かったよ。」

それらは折りたたまれて隠された羽ですよ？

ラザロは突然立ち上がった。「これ以上は話したくない、ニコラス。」

ニコラスは彼を落ち着かせ、「許してくれ。いや、座りなさい！もう君の容態については何も言わない。座りなさい、息子よ」と言った。ラザロは座った。

「ラザルス、私はあなたをずっと尊敬してきました。あなたは他の従士の少年たちとは全く違いました。彼らのように信仰や義務を疑ったり、些細なことで言い争ったりすることは決してありませんでした。あなたはいつも冷静で、自分の義務を理解し、発言する前に言葉をよく考えていました。」

ラザロは洞窟の床に広げられた食料の袋に目を向けた。「オディノ修道士は私を迎えに来ると言っていたのに、あなたが代わりに来た。なぜ彼の血を水筒に入れて持ってきたのだ？」

「どうして分かったの？」

「彼の匂いがする 確かにオディノだ。なぜ彼は血を流した？なぜ今、お前は彼の血を持っている？」

ニコラスは落ち着かない様子で身じろぎ、視線を袋とラザロの間を行ったり来たりさせた。彼は深呼吸をして岩の上で体を起こした。「ラザロ、君に伝えなければならぬことがあるんだ。」

「オディノ修道士は死んだのか？」ラザルスは尋ねた。

「そうだ、ラザロだ。」

ラザロはむせび泣いた。「でも、どうやって？」

「あの船長 お前の父親を殺した張本人だ。」

「なぜ彼は彼らを殺したのか？」

「イヴァンとオディノが君を守ってくれたからだ。」

洞窟には静寂が訪れ、二人は炎を見つめていた。ラザロは言った。「それから私は今度はこの船長を殺すべきだ。」

「いや、ラザロよ。汝、殺すなかれ。」

「目には目を！」ラザロは吐き捨てた。

「まさか本気で言ってるんじゃないよね？」

ラザロは肩を落とした。「いや、でも感じるんだ。」

「私も同じ気持ちです。オディノは私にとって父親のような存在でした。だからこそ、私は今ここにいます。あなたには、どうしてもやらなければならない大切なことがあるのです。」

"何をする？"

ニコラスは立ち上がり、袋のところへ歩み寄り、中を漁った。「地図の読み方はわかるか？」

「ええ、そうです。父が教えてくれました。」

「地下墓地の地図？」

「写字室で地図を見たことがある。今でも覚えているよ。」

ニコラスは袋の中から折りたたまれた羊皮紙を取り出した。

「具体的にどのような地図をご覧になった記憶がありますか？」

「全員です。」

「いいえ、あなたのお父さんはあなたに見せるために何匹連れてきたのですか？」

「ある時、父に新しい地図を頼んだら、父は写字室にある地図は全て見せたと言ったんです。」

ニコラスは立ち上がり、頭を掻いた。「全部？写字室には何百枚もの地図があるはずだ。全部だなんて、なんてことだ。」ニコラスは洞窟の床を見渡し、再び顎を撫でながら尋ねた。「教えてくれ、ラザルス。あのたくさんの修道院の地図の中に、イタリアという国を覚えているか？」

ラザロは南東を指さした。「あそこだ。レオン湾とティレニア海の向こう、サルデーニャ島の東だ。イタリアは君のブーツの形をしている。」

周囲はほとんど海に囲まれ、山々が中央部を縦断している。ウンブリア州もその中心に位置し、カンチェッロ修道院は中心部のすぐ北にある。

ニコラスは眉を上げ、完全に圧倒された。それから彼はさらにラザロを試した

巧妙な試みで、相手を混乱させ、おそらく自身の地理的記憶に疑問を抱かせようと、彼はその能力を発揮した。「スコットランド王国はどうなったのですか？」
ラザルスは反対方向の北西を指さした。「あちらだ。短い海峡を渡った先で、イングランドの北側だ。」

「ラザロよ、私の家はどこにあるのですか？」

「エフライムの村はブルゴーニュ地方の南部にあります」とラザルスはやや東の方を指差した。

「その通りだ。」

「ムラトは？」

「あっちの方だ。」

ニコラスは首を横に振った。「実に驚くべきことだ。』彼はうなずいた。「主はあなたに素晴らしい才能を授けてくださった。」

「なぜ私にそんな場所のことを聞くのですか？」ラザロは彼に尋ねた。

ニコラスは深呼吸をし、岩に戻ってラザロに折りたたんだ羊皮紙を渡した。ラザロはそれを開いて目を通した。ページにはフランス、イタリア、そしてそれらの周辺諸国と海域の図が描かれていた。「この地図、よく覚えているぞ。」

「同じ修道院の写字室から来たものだから、そう思うのも無理はない。ラザルス、よく聞いてくれ。」

私は食料を届けるためだけでなく、オディーノ修道士の最後の願いを叶えるためにもここにきました。

彼はあなたにイタリア、ウンブリア州のカンチェッロ修道院に行ってもらいたいと願っています。そしてあなたは既にその場所を知っていることを示しました。そこであなたはサルヴィティーノ修道士を呼び出すことになっています。彼はガトーネに関する詳細に非常に詳しい老修道士です。

ラザロはイワンとの会話、そして手紙と借りがあったことを思い出した。

「あなたは彼にこう伝えなければならない。」

「イタリアに行くだって?!」ラザルスは口を挟んだ。

「ラザルス、話させてくれ。ガーディアン修道院の門石が開かれたことを彼に伝えろ。お前は門石のイヴァン・ゴグ修道士の息子だと伝えろ。そうすれば彼はお前のことを知っているだろう。それから、血の入ったフラスコを持ってきた。それを

サルヴィティーノにこう伝えなさい。「これはオディーノ修道士の血だ。そうすれば彼はどうすべきか分かるだろう。」

「いや、いや、できない」とラザロは首を振りながらもった。

ニコラスは続けて言った。「サルヴィティーノ修道士を連れてきて、これらのことを彼に伝え、修道院に連れ戻してください。オディーノ修道士は、自分が修道院で最年長かつ最も地位の高い修道士だと言いました。

下級評議会の一員であり、おそらくガルディエンス修道院とカンチェッロ修道院で唯一、翻訳された碑文を通して門石を解読し、正しく再び閉じることができる知識を持つ修道士でしょう。彼はまた、他の個人的な問題でもあなたを助けてくれるでしょう。

亡き父の遺志に関する事なら、水筒を渡したら、そのことを必ず伝えてください。途中で割らないように気をつけてくださいね。お父様もきっと喜んでくれるでしょう。」

ラザルスは突然立ち上がり、地図を洞窟の床に投げ捨て、火から離れてニコラスの方を振り返った。「遠すぎる。父上は太陽がそう言っていた。お前はそういうことを知っているのだから、なぜ修道士を呼びに行き水筒を持ってこないんだ？」

「できません。女性が私を待っているのです。」

「女性ですか？」

「待っているのは、もうすぐ妻となるマルタだ。さあ、ラザロ、座りなさい。お願いだ。私の最愛のマルタについて話そう。」

「しかし、あなたは独身の誓いと禁欲の誓いを守っているのではないのですか？」ラザロは火のそばに戻り、座った。

ニコラスはラザルスの質問を一蹴した。「彼女はムラトに住んでいる。亡くなった村の靴職人の未亡人だ。彼の魂が安らかであることを祈る。彼女の話を知りたいか？」

「そうしたいところだ」ラザルスはため息をついた。

「マーサとは、とんでもない偶然の出会いだったんだ。」ニコラスは笑いをこらえながら続けた。

「まあ、完全にそうというわけではありません。ヴォニグ修道院長が私を新しい村の教会に派遣するたびに、私はいつも地元の靴修理店に惹かれていました。ほら、私の中に根っからの靴職人魂が宿っているんです。」

「約1年前、修道院長は私をムラトに派遣し、地元の教会の修繕を監督するよう命じました。当然のことながら、好奇心旺盛な靴職人としての本能が刺激され、私は地元の靴屋へと向かいました。ところが、ドアを開けた途端、投げつけられたブーツが私の顔面に直撃したのです。」

私が覚えている最後の記憶は、その靴のかかとだった。目が覚めるまで。

「意識を取り戻した時、私の目に飛び込んできたのは、この上なく美しい光景だった。」彼はくすくす笑いながら顎を撫でた。

「自分が死んでいたのだと悟った。頭上には天使の顔が浮かび上がっていた。それは愛するマーサだった。彼女は濡れた布で私の腫れた鼻を拭いてくれた。私たちが話している間、彼女は私の顔を優しく看病してくれた。」

「後になって分かったのですが、彼女はドアにブーツを投げつけようとしていたのですが、私の顔が邪魔になったのです。夫が亡くなった後、彼女は店を維持するのに苦労しました。彼女は客に、夜に別の男性が来て靴を修理していると伝えていましたが、実際には彼女自身が修理していました。しかし、村の祈りの集まりで噂が広まり、何人かの女性は密かにその男性が現れるのを待ち構えていました。私が彼女の店に着く少し前に、何人かの女性が店を出て行き、彼女こそが本当の靴職人だと非難し、客全員に女性が靴を修理していると告げると脅したそうです。」

「翌日、妻たちは夫たちに修理が必要な靴を持ってこさせた。それから彼女を注意深く監視した。女というのはそういうものだ。一度自分のやり方に固執すると、意地悪になることさえある。」

とにかく、靴職人としての本能が彼女を助けた。彼女にドアを大きく開けるように言って、彼女が外に出ている間に私は作業に取りかかった。叩いたり、ドンドンと音を立てたりと、かなり大きな音を立てたんだ。

ニコラスは笑った。「あの女たちの顔を見たらよかったのに。店は詮索好きな女たちでいっぱい、みんな口を開けて見ていたよ。私は気づかないふりをして、靴を片方ずつ直していった。もうこの仕事の腕は鈍っていたと思うけど、まるで熟練の馬のように、完璧に修理していった。そのうちの一人が、私がいともマーサの靴を修理していたのかと、大胆にも聞いてきたんだ。『もちろんさ、お嬢さん』と私は言った。『それとも靴は勝手に直ると思っていたのか？』彼女はそれ以上、修道士に質問する勇気はなかったよ」彼はまた笑った。

「マーサは彼らに、彼女の『靴職人の神父』のために靴がもっとあるかどうか尋ねたのよ。ああ、彼らが店を出て行くときの顔ったら！私は笑いをこらえるために彼らに背を向けたわ。」

「ニコラスよ、偽証をしてはならない。」ラザロが口を挟んだ。

ニコラスの顔から笑顔が消えた。「まあ、マーサが倒れるのを黙って見ているわけにはいかなかったからね。」

狼たちへ。真実が嘘で修復できる以上のものを破壊する時、私たちは時としてその度合いを見極めなければならない。そうだ、私は嘘をついた、ラザロ。それは、私がこれまで言わざるを得なかった嘘の中で、最も甘美な嘘だったと告白しなければならない。

"どうして？"

「マーサとはこの一年で親しくなった。彼女の店を手伝ったりもした。彼女は私に結婚を申し込んでくれた。店を売って、私と一緒にブルゴーニュの故郷の村に戻ることに同意してくれた。ついに故郷に帰れる。兄と仲直りして、三人で靴修理店を開こうと思っている。できれば父の古い店を買い取りたいね。」

「それでは、あなたは司祭としての誓いを破ったことになりませんか？」

「いいえ、ラザロ。私はまず司祭になることで、自分が壊してしまったものを修復したのです。主は私が修道士のままであることを望んでおられませんでした。今、それが分かりました。主は私に、隠れるのをやめ、修道院の壁を出て、故郷に帰り、過去の過ちを正すようにとおっしゃったのです。」

「私には理解できません」とラザロは答えた。

「主はしばしば不思議な方法で働かれるのだ、ラザロよ。私でさえ、主の召命の意味が分からなかった。」マーサがブーツで私を殴るまではね。それ以来、彼は私の真の使命に気づかせてくれたんだ。」ニコラスはうなだれて言った。「父がまだ生きていて、私の帰りを歓迎してくれたらよかったのに。」彼はマーサを愛するだろう。

「もしかしたら、あなたは今、主があなたを導いてくださっているのは、あなたがマルタを愛しているからだと思われているのかもしれませんが。そして、その思いがあまりにも強いので、神の御心こそがあなたを導いていると思われているのかもしれませんが。主はあなたを修道士にするために遠くへ導き、そしてまた故郷へ連れ戻すことができるでしょうか？」

「おそらく、自分自身を見つけるためでしょう、ラザロ。私も同じことを何度も考えましたが、主が私に語りかけてくださるのを聞きました。心の中では、主が私を導いてくださっていると分かっています。」

「そして、修道士よ、彼はあなたにもムラトの女たちに嘘をつくように命じたのか？」

ニコラスは眉をひそめた。「いや。」彼は苛立ちを募らせながら姿勢を変えた。「教えてくれ、ラザロ。君は神の意志に従おうとしていると思うか？」

"私はします。"

「あなたが修道院に嘘をつき、風の病にかかったふりをしたとき、あなたは神の意志に従っていたのですか？」

「言われた通りにしました。」ラザロはうなだれた。

「ラザロ、私はあなたの父親を深く尊敬していました。あなたに関する彼の判断に疑問を抱くつもりはありません。しかし、一つだけお尋ねしたいことがあります。なぜ彼はあなたについて皆に嘘をついていたとあなたは考えているのですか？」

「私を危険から守ってくれる。彼は私の父だから。」

「マーサを危険から守るために、私は嘘をついたのです。」

「しかし、もし彼らがマーサの真実を知っていたら、彼女を殺さなかつたらどう？」

「嘘はどんな基準で見ても嘘ではないのか？あの状況下で、私は正しいと判断したことをした。その行為は、たとえ間違っているように見えたとしても、より大きな善のためだった。お前はまだ…学ぶべきことがたくさんあるぞ、ラザロ。」

「そうかもしれない」とラザロはぶっきらぼうに答えた。彼は揺らめく炎を見つめ、かつて真理を誓った囚人と交わした会話を思い出していた。その囚人は自分の名前を「キリストにある貧しい者」とだけ名乗った。ラザロは、その男が今頃は自分の真実をすべて告白し、そのために「骨まで焼かれた」のだらうと考えた。

「それで、このゲートストーンとは何なんだ、ラザロ？」

"あなたは知らない？"

「私は下級評議会の修道士でもなければ、彼らの写本に触れる機会もなかった。修道院のほとんどの修道士と同じように、ごく普通の修道士だった。」

「それは門だが、一風変わった門だ。それについては語るべきではない。」

「地獄へ、という意味ですか？」

"はい。"

「私も多くの人と同じように、そのような噂を耳にしたことがある。」

ラザロは身じろぎをした。ニコラスの質問が続くにつれ、彼は不安を感じ始めた。長年下級評議会の長老修道士を務めてきたイヴァンもオディーノも、長老修道士同士の内密なささやきにもみ許されるような事柄について、彼が軽々しく議論することを断固として禁じていたはずだ。執拗に続く質問に、ラザロの修道士に対する疑念は募っていった。

ニコラスは続けて言った。「さらにこんな話もある。女の幽霊が徘徊しているという噂がある。修道院の敷地内。夢の中に忍び込むように。それはここから来るのだろうか。ゲートストーンから？」

「彼女は、えっと…ニコラス、私がマウンテンマウスに隠れていることは兵士たちには言わないでね、いい？」
あなた？”

「心配する必要はない、ラザルス。私は修道院に戻るつもりはない。火事と崩壊で完全に破壊されてしまったのだから。」

ラザルスは口を挟んだ。「誰かにサルヴィティーノ修道士を呼びに行かせて、門石を閉めさせなきゃ！修道院には誰もいないのか？」

ニコラスは首を横に振った。「私は二度とあの焼け焦げた修道院の壁の中に足を踏み入れることはないだろう。今となっては、地獄や地獄の門、そして私がかろうじて逃げ延びた冷酷な兵士たちの軍団と関わる必要などない。いや、私は代わりにムラートへ行き、マーサを迎えに行く。そして、この邪悪な場所を遙か彼方へと去るのだ。」

「ゲートストーンが開いているのに、どうして不安を感じずにいられるだろうか？」

「私は気にかけています。私がオディーノに洞窟に来て食料を届けると約束した大きな理由の一つは、まさにその気にかけているからです。そして約束を守る男として、私は

彼は自分の願いを伝え、あなたに知ってほしいことをすべて話してくれた。まあ、ほとんどすべてと言ってもいいだろう。

まだ続きがあります。オディーノ修道士は私に、あなたに約束をするように頼むと誓わせました。

「サルヴィティーノ修道士を連れてきて、開かれた修道院の門石のところへ連れてきてください。そうすれば、彼はもう一度門石を封印しようと試みるでしょう。」

「私の言葉ですか？」ラザロは岩から降りて立ち上がった。「それについては私の言葉は言えません！」
私にはできません！

「オディーノは、君が父親と同じように答えてくれることを願っていると言っていた。それが彼が私にささやいた最後の言葉だった、ラザルス。君は父親のようになり、それ以上の存在になるだろうと。」

「それはやりすぎだ。」

「わかった」ニコラスは頭を垂れ、炎を見つめた。ラザロは凍りついたように立ち尽くしていた。

「何を理解しろというんだ？」ラザロはついに尋ねた。

「オディーノに頼まれたとしても、マーサもいるし、私には無理よ。」

「それだけか？ ゲートストーンは営業中なのか？」ラザラスは肩をすくめて尋ねた。

「私はオディーノが私に期待したことをすべてやり遂げました。残りはあなたに期待しています。そして、あなたが選択をされたように、残念ながら、ゲートストーンはそのままの姿のままです。」

「でも、ニコラス、あなたは私ができないことを知っているでしょう。私は光の中を歩くことができません。イタリアまで歩くこともできません。遠すぎるのです。オディーノ修道士は私にできないことを尋ねます。それはあまりにも無理です、修道士！」

ニコラスは顔を上げ、ラザルスと目を合わせた。「彼は君がイタリアまで歩いて行くつもりはなかったんだ。」洞窟は静まり返った。

ラザロはついに口を開いた。「あなたが想像するようなことは、私にはできません。」

「試したことはあるかい？」ラザラスは何も言わなかった。ニコラスは薪の山から新しい棒を一本掴み、その先端を火の中心に突き刺し、火が明るく燃え上がるまで慎重に回した。「もしかしたら、考えを変えてもらえるかもしれない。」ニコラスは燃える松明を掲げ、立ち上がった。「さあ。」彼は振り返り、洞窟の奥深く、狭い岩窟の入り口へと向かった。ラザラスもそれに続いた。

「実は、修道院に着任して間もなく、この洞窟を発見したんです。」

「マウンテンマウスだ」とラザラスは付け加えた。

「君も見たのか？岩の中の顔を？」

「ええ、そうしました。でも、ニコラス、なぜ修道院からそんなに遠くまで来ていたのですか？」

「あれこれ考えたり、物事をじっくり考えたりする。自分自身を探しているのかもしれない。散歩しながら、色々なことをあれこれ考えるのが好きなんだ。」

「それで、あなたは自分自身を見つけたのですか？」ラザラスは彼に尋ねた。ニコラスは彼の言葉に皮肉が込められているのを感じ取った。言葉。

「代わりにマウンテンマウスを見つけたよ」とニコラスは笑った。二人は洞窟の通路を通って中に入った。ニコラスは松明を手にもつかめながら進み、ラザラスは低い岩の天井に気を遣いながらその後ろをついて行った。

「私たちはどこへ行くのですか？」

「前へ。来い。」

「それくらいは集めたよ」とラザラスはぶつぶつ言った。ニコラスはくすくす笑った。二人は通路を進むと、やがて壁が崩れ落ち、湿った空気が刺激臭で充満した広大な洞窟が現れた。光の輪が周囲の床を照らし、彼らは洞窟の中央へと歩いた。「この匂いは何だ？」ラザラスは尋ねた。「何かがいる。」ラザラスは暗闇の中を探った。

「そうだ、君の先生たちだ。彼らは君に飛ぶことを教えてくれるよ、ラザラス。」ニコラスは立ち止まり、振り返った。

「誰が？どうやって？」

「これが一番いい方法だ。」ニコラスは松明を高く掲げ、洞窟の高い天井がオオコウモリで埋め尽くされているのを露わにした。ラザラスは畏敬の念に打たれ、洞窟上部の鍾乳石を見下ろしていた。一万もの光り輝く黒い目が彼を見下ろしていた。

「ネズミか？」ラザラスは尋ねた。数匹のコウモリが天井から落ちてきて、洞窟の周りを旋回した。

「見て！」ラザラスは彼らを指さして言った。「飛んでいるよ！」

「ええ、そうです。コウモリです。コウモリは飛びます。日が沈むと洞窟を出て、夜明け前に食事をして戻ってきます。今は休んでいるところです。私は昔からコウモリに魅了されてきました。」

「コウモリ 鳥みたいなものか？」ラザラスは催眠術にかかったように天井を見つめながら、独り言のように呟いた。

「コウモリは鳥とは違う。コウモリは鳥が休む夜に飛ぶ。そして日中はコウモリは鳥が飛ぶとき、鳥は休息する。太陽の昇り沈みに合わせて、鳥たちは交代で空を支配するのだ。」

ニコラスは笑った。「見つけたのは僕だよ。オディーノが君が鳥を見たいと言っていたのを思い出して、彼のもとに連れて行ったんだ。」ニコラスは天井を見つめた。

「もう死んでいたのか？」

「ええ、修道院街道沿いの岩場に転がっていました。あの道はよく歩いたんですよ。いろいろなものを見つけました。」

「たいまつを貸していただけますか？」とラザロが尋ねた。ニコラスが下を見ると、ラザロが手を差し伸べていた。

「もっと高く持ち上げてあげようか、ラザロ。」ニコラスは天井をよりよく照らすために、できる限り高く持ち上げた。

「私が松明を持ってよろしいでしょうか？」ラザルスは再び尋ねた。ニコラスはうつむいた。

「お望みなら。」ニコラスは燃える棒をラザロに渡した。ラザロはそれを高く掲げ、洞窟の中を歩き回り、天井を調べた。一方、ニコラスはその場に留まっていた。

「そして、彼らは夜にしか飛ばないのか？」ラザロは彼に言い返し、その言葉は洞窟。

「その時だけだよ」とニコラスは答えた。

しばらくして、ラザロとニコラスは外の洞窟に戻り、火をくべた。

「もう一度尋ねるぞ、ラザロよ オディーノのために 君はやってくれるのか？」

「私はコウモリではありません」とラザロは答えた。

「オディーノはコウモリにそんなことを求めるはずがない」とニコラスは答えた。

「もし私が『やる』と言った後で、それを実行できなかったら？」

「私がオディーノにマーサのことに修道院を去る計画を話したとき、彼はこう言いました。『決意して失敗する方が、決意を欠いたまま失敗するよりましだ』と。ほらね、ラザロよ、名誉は言葉だけではなく、行いによって決まるものだ。彼が君に求めたのは、せいぜい「努力する」と約束することだけだ。もう一度答えてくれれば、オディーノ修道士の最後の頼み事で君を再び煩わせることはないだろう。」

「イタリアはなんて遠いんだ。それに太陽も？」ラザルスは洞窟の入り口をちらりと見た。

「ラザロ、君の答えは？」沈黙が続いた。

ラザロは「はい」と答えた。洞窟の床から、足の手袋の横にあった地図を拾い上げ、ざっと目を通した。「約束しましょう。修道士を連れてくるよう努力します。それだけです。」

ニコラスは微笑んで少年の肩を軽く叩いた。「君にはこれ以上何も求められていない。」

「立派な試みだった。イヴァンも君を誇りに思うだろう。」ラザルスは鼻をすすった。その時初めてニコラスは、ラザルスが仮面の下で泣いていたことに気づいた。

「どうしたんだ？」とニコラスは尋ねた。

「いえ、修道士様。私がやります。」ラザルスは気を取り直した。「サルヴィティーン修道士を呼んでできます。」

そうすれば、彼はゲイトストーンの件で私たちを助けてくれるかもしれない。」

「よく言った。君は父親そっくりで、それ以上だ。」少年はマスクの内側で涙を拭いた。

「お腹空いた？ たくさんあるよ。」

「そうだ」とラザロは認めた。ニコラスは間に合わせの袋に歩み寄り、布で包んだ肉とパンを取り出した。彼は水筒をつかみ、ラザロの膝の上に夕食を盛り付けてから、自分の席に戻った。

「あなたは何も食べないのですか？」ラザロは修道士の空っぽの手と膝を見つめながら尋ねた。

「これは君のものだ。もし君がどうしても使い切ろうとするなら、一人の少年の1か月分の食料くらいは用意できたかもしれない。」ラザロは彼をじっと見つめた。「さあ、食べなさい！」少年は食べ物にかぶりついた。

ラザロは食事をしながら、ニコラスがさらに会話を交わして彼を楽しませていた。そうして時間は過ぎていった。ついにラザロは食事を終え、水袋にコルク栓を閉めた。ニコラスはそれを袋に戻した。

「食事は控えめに、そして食事と一緒に水をたくさん飲むと、お腹が満たされます」とニコラスは言った。

肩越しに指示を出した。

ラザロは続いた。「そうしよう。」

「さて、ラザロよ。そろそろムラトへ向かう時が来た。しばらくの間、お前は山の入り口で安全に過ごせるだろう。この辺鄙な場所には誰も来ないのだから。旅の準備をする時間は一ヶ月ある。主が与えてくださった翼の使い方を練習しておけ。上空を飛ぶコウモリからその使い方を学ぶのだ。」

「今夜は泊まらないのですか？」ラザロは彼に尋ねた。「眠れば元気になりますよ…」

「いいえ、ラザロ、私は行かなければなりません。マルタが私を待っているのです。あなたはきっと大丈夫です。私は確信しています。」

ラザロは頭と肩を落とした。

二人は最後にもう一度抱き合い、ラザラスは洞窟からニコラスが尾根の向こうに消えていくのをじっと見つめていた。彼は火のところに帰り、枯れ木を数本追加した。彼は座って暖まりながら、コウモリのことや、修道士を連れてくるという厳粛な約束について思いを巡らせた。彼の目は炎に釘付けになっていた。やがて、ラザラスは自分の首にかかっているイワンの木製の祈りの十字架を探した。彼はそれを抜き取り、父親がいつもしていたのと同様のように指の間で転がした。

炎の中で、彼は煙を上げる枯れ木の枝の割れ目から這い出てくる黒い甲虫を見つけた。その虫は燃える枝を駆け下りながら、揺らめく炎の中を慎重に旋回していた。ラザロの視線は、その虫が冷たい床に飛び降りるのを追った。

洞窟から出て、安全な距離までよじ登った。鳥は止まり、翼を広げ、洞窟の入り口に向かって飛んでいった。温かいローブ、疲れた手足、そして満腹の胃袋で、彼は座ったままうとうとし始めた。頭が揺れ、ガタガタと震え、何度も眠りに落ちては飛び起きた。ついに、彼は火の温かい光から離れ、壁の狭い隙間を見つけ、そこで最後に残された頼りになる馴染みのある空間に身を委ねた。

絶えず変化し続ける夢の世界。

～*～

翌日の大半、ラザロは新しい住処を探検した。そこは、曲がりくねった通路、でこぼこした床、そして互いに繋がった洞窟が連なる、黒い地下墓地だった。滴る水の匂いと音に誘われ、彼は山腹へと続く狭い通路を登っていった。通路はやがて小さな洞窟へと続き、その床のほとんどは、天井から滴り落ちる水で満たされた浅い水たまりだった。

その日、ラザロは何度も目を細めて洞窟の入り口から外を覗き込んだ。太陽の光を浴びてキラキラと輝く景色を見渡しながら、ラザロはローブ越しにも、乾ききった石の谷から放射される強烈な熱を感じた。彼は食料を運び、狭い通路を通して山の奥深く、コウモリの棲む洞窟へと入っていった。

夕暮れが訪れた。ラザロは洞窟の中で再び火を起こした。その光が天井と、そこにいる何千ものコウモリを照らした。洞窟が暖まり、火の煙が天井に立ち昇るにつれ、洞窟の天井は生き生きと動き出した。そして何百匹ものコウモリが止まり木から飛び立ち、洞窟の周りを旋回した。その数は増え続け、洞窟はコウモリで埋め尽くされた。

ラザラスはくすくす笑った。立ち上がって両腕を広げると、翼の渦が彼を包み込んだ。翼は彼のローブに止まり、彼の上を這い上がってから再び飛び立った。ラザラスはフードを引きちぎり、満面の笑みを浮かべた。コウモリが彼の髪を這い回る中、彼はマスクをローブのベルトに押し込んだ。ラザラスはコウモリに覆われた両腕を上げたまま、ぐるぐると歩き回った。彼のくすくす笑いは、洞窟中に響き渡る大笑いへと変わった。羽ばたく竜巻の中で、ラザラスは洞窟の中をワルツのように踊り回り、酔っぱらったオディーノのようにヒステリックに笑いながらよろめいた。

洞窟の外、オーヴェルニュ地方東部の金箔の丘陵地帯では、驚くべき、目に見えない、そして短命なドラマが繰り広げられた。フランスの山々の中でも、夜明けの月は、ただ一人にだけ微笑みを投げかけているようだった。

山は口を大きく開けてヒステリックに笑い、岩肌に群がるコウモリの大群を吐き出した。しかし、コウモリはすぐに木々の梢を飛び越えて姿を消し、かつて響き渡っていた山の笑い声は、ゆっくりと悲しみのうめき声へと変わり、苦痛と孤独の恐ろしい叫び声へと変わり、窒息しそうな苦悶と喘ぎ声へと変わっていった。

途切れることのない嘆きの叫び声　そして恐ろしく恐ろしい音へと変わり、深く心を乱すほどで、月さえも見下ろして、叫び声を上げる山の口のために涙を流すほどだった。

【第9章終了】



この文学作品は

d専ら献身的に

エドガー・アラン・ポー（1809年 - 1849年）

—彼の遺志が私たち一人ひとりの心の中で生き続けることを願います—



~[GothicNovel.Org](https://www.gothicnovel.org)~